

あたたか いねこ

福田
修志

◆登場人物

沢登
華

沢登
菜央

烏山

古い家屋。居間にあるテーブルと椅子。
菜央がやって来て、バッグを椅子に起き、奥へ行く。
華がやって来て、椅子に腰掛ける。
奥から菜央が戻ってくる。

菜央

シャンプー持って行く？

華

買えば良いんじゃない？

菜央

うるさくない？そういうの。

華

ああ、じゃあ、持って行こ。

菜央は奥へ行く。華はテーブルにもたれ掛かる。
菜央がシャンプーを持って戻ってくる。

菜央

紙、紙……。

華を見て立ち止まる菜央。

菜央

……何で、座ってんの？

華

ちよっとさあ……休憩してからにしよう？

菜央

は？

華

何か飲み物。

菜央

ちやちやっとな準備して、向こう行ってから休憩すれば良いんじゃない？

華

飲み物。

菜央は奥へ行く。華はスマホをいじり、しばらくすると外を見る。

華は立ち上がり、空を見る。

華

菜央？

菜央

……。

華

(大きな声で) 菜央？

菜央

(声のみ) 何？

華

雨、降りそうなんだけど？

菜央

(声のみ) だから？

華

洗濯物。

菜央

(声のみ) ああ……お姉ちゃん、やって。

華

持って行くの？これ。

菜央

(声のみ) 分かんないけど、入れといて。

華

ああ、もう……。

華が去る。少しして菜央が飲み物を持って戻ってくる。
菜央は、飲み物をテーブルに置くと、バッグから紙を取り出す。

菜央 えっと……箸、スプーン、コップ……。

紙に書いてあるものを読み上げながら、菜央は奥へ行き、色々持って戻って来て、また紙を見る。

菜央 ……ガウン？

菜央は考え込む。

菜央 ガウン……。

華が洗濯かごに洗濯物を入れて戻ってくる。

華 入れたから、畳んでね。

菜央 ねえ、ガウンってあるかな？

華
ガウン？

華は菜央が持っている紙を覗き込む。

華
そんな洒落たもの、この家にある気がしない。

菜央
だよね……。

華
要る？それ。

菜央
病院の中、歩く時とかに、いるんじゃないの？

華
出歩かなきゃ良いじゃない。

菜央
そういうわけにいかないでしょ。

華
いくんじゃない？

菜央
(華の言葉を聞かずに) 買うか……。

華
似合わないと思うよ？お母さんには。ガウンって感じじゃないもん。

菜央
だって書いてるから。

華
全部、要るわけじゃないでしょ。

菜央
一応、無いと。由美子叔母さんに甘えすぎてもさ……。

華は洗濯かごをその辺に置いて、椅子に腰掛け、飲み物を飲む。

華 じゃあ行ってきて？留守番しとくから。

菜央 お姉ちゃん、行ってよ。

華 嫌だよ。

菜央 じゃあ、代わりに全部準備する？

華 留守番だけしとく。

菜央 あのさ……。

華 行ってらっしゃい。

華はスマホをいじる。

菜央 ……線香ぐらいあげてね？

華 嫌だよ。しばらくあの匂いは要らない。

菜央 そういう問題？

華 お断りします。

菜央 それくらいしようよ？

華 ……嫌なの。

菜央 お姉ちゃん、何にもしなかったじゃない。私だけ動いてさ……分かるよ？色々あったの知ってるし、したくない気持ちも分かるけどさ……お父さん、可哀想だよ。

華 ……今更、仲良くする方が変じゃない？

菜央 そんなことないってば。

華 あるの。

菜央 ないって。

華 あんたが知ってること以上にね、色々あったの。

菜央 ……。

華 どの面下げてって、私が思うの。

菜央 お姉ちゃん……。

華 由美子叔母さんにも、さんざん言われたから、その通りだって思うもん。本当はあんたもそうで

しょ？何で来たんだって思ったでしょ？

菜央 怒るよ？

華 ……行ってきて。寝てないから疲れてるの。無駄な体力使いたくない。

菜央 ……。

チャイムが鳴る。反応する菜央。俯いている華。

再び鳴るチャイム。

菜央 はーい。

菜央は去っていく。華は、俯いたままにいる。

玄関での会話（声のみ）

菜央（声のみ）はい。

烏山（声のみ）すみません……沢登さんのお宅ですよ？

菜央（声のみ）……はい。

烏山（声のみ）沢登さん、いらっしやいますか？

菜央（声のみ）えっと……どちらさまですか？

烏山（声のみ）あ、すみません……（名刺を渡して）こういうものです。

菜央（声のみ）ちよっと待って下さい。

居間に菜央が戻ってくる。

菜央 お姉ちゃん……探偵がね、お父さんを訪ねて来た……。

華 その手には乗らないから。

菜央 いや、ほら。

菜央は華に名刺を渡す。

華 烏山探偵事務所？

烏山

(声のみ) カラスヤマです！

顔を見合わせる華と菜央。

菜央

(玄関に) ちょっと待って下さい！

華

(囁いて) どうすんの？

菜央

(囁いて) 入れるしかないでしょ？

華

(囁いて) 何で？

菜央

(囁いて) 玄関で話すわけにもいかないでしょ？

華

(囁いて) 事件だったら、どうすんのよ？

菜央

(囁いて) それなら尚更聞かなきゃでしょ？

華

(囁いて) いや、でもさ……。

烏山

(声のみ) 出直しましょうか？

菜央

(玄関に) 入って下さうい。

華

(玄関に) ちょっと待って下さうい。

菜央

(囁いて) 何？

華

(囁いて) あんた心の準備出来てるの？

菜央

(囁いて) 何が？

華

(囁いて) だから、お母さんの浮気調査とかだったらどうするわけ？

菜央 (囁いて) そんなことないよ。

華 (囁いて) 分かんないでしょ？

菜央 (囁いて) 考えすぎ。

華 (囁いて) とにかくどんな話にも耐えられる強い気持ちを持って迎えるの。寝てなくて弱ってんだからさ、良い？

菜央 (囁いて) ……オーケー。

大きく深呼吸をする二人。

華 オーケー？

菜央は頷く。華は菜央を玄関に促す。

菜央 今、行きます。

菜央は玄関に向かう。

華は、何となく部屋を片付けて、洗濯かごを奥へ持って去る。
烏山と菜央が戻ってくる。

菜央 すみません、ちょっと散らかってますけど……。
烏山 あ、いえ……。
菜央 どうぞ。

菜央は烏山を椅子に促し、烏山は椅子に腰掛ける。
華が戻ってくる。

華 どうも……。
烏山 こんにちは。

華は椅子に腰掛け、落ち着かない様子でいる。

烏山 あの……。
華 話は、妹が来てから、聞きますので。（自分を指して）あ、娘です。
烏山 あ、はい……。

落ち着かない、華。烏山は、部屋の中をキョロキョロ見ている。
菜央が飲み物を持って戻ってくる。

菜央 すみません、こんな物しかなくて……。
鳥山 お構いなく。

華は菜央に椅子に座るように促す。

華 えっと……探偵さん？

鳥山 あ、はい。カラスヤマです。

華 そうですよ。トリヤマって、漫画家になっちゃいますもんね。

鳥山 ……ですね。

華 何を言ってるんでしょうね……ははははは。

鳥山 ははははは。

菜央 で、父とは、お仕事で？

鳥山 はい。依頼を受けていて、何度か連絡したんですけど、なかなか返事がいただけなくて……。

菜央 ああ……。

鳥山 何時頃、お帰りになりますか？

菜央 あの……。

菜央は華を見る。華は菜央を促す。

菜央 えっと……帰らないんです。

烏山 出張か何かで？

菜央 えっと……亡くなったんです。だから……。

烏山 ああ……あ、すみません。

菜央 いえいえ、良いんです。

烏山 本当、何か……すみません。

菜央 あ、はい……。

華 あの……どうでしょうか？

烏山 そうですね……。

華 父の意志を、その……尊重したい気持ちはあるんですけど……あるんですけど……ちよつとその……揉めたくないなって。

烏山 いや、お代はもう、戴いているので。

華 そういうことじゃなくて、その……ね？母が浮気してたとか、そういうことだったら、知らない方が良いかな、とか……。

烏山 いや、違いますよ？

華 あ、ああ……良かった。

烏山 ええ。

華 あはははは。

烏山 あはははは。

華 (菜央に) ねえ、良かったね？

菜央 お姉ちゃん、心配しすぎ。

華 だってさ。

菜央 メチャクチャドキドキしたじゃない。

華 ゴメンゴメン。

烏山 あの、浮気調査じゃ無いんです。

華と菜央は、一瞬固まる。

華 浮気調査じゃない？

烏山 はい。

華 ……父は、何を？

烏山 ネコの搜索です。

華 ネコ？

菜央 飼ってたの？また？

烏山 こちら、依頼書で……。

烏山は依頼書を渡し、二人はそれを見る。

菜央 うん、お父さんの字だ。
華 分かる？
菜央 分かるでしょ？
烏山 探してたのは、この子です。

烏山は、ネコの写真を渡す。二人はそれを見る。

華 知ってた？
菜央 知らない……。
烏山 ……娘さん、ですよね？
華 はい。
菜央 私、県外だし、お姉ちゃん、市内だけど、一人暮らししてるから……。
華 殆ど帰ってこなかったんですよね……。
烏山 ……そうですか。
華 (写真を見て) ミチコの子供じゃないよね？
菜央 産んでないと思う。
華 だよね……。
烏山 ……どうしましょうか？
華 ……どうしましょうか？

烏山 お代は戴いてるんで、探すのは構わないんですけど……。

華 ですよね……。

菜央 探そうよ。

華 ……探す？

菜央 だって、遺言みたいなものでしょ？

華 うん……まあね。

烏山 ……責任重大ですね。

菜央 あ、いや、そういうんじゃないんですよ。気持ちの問題で。

烏山 はい、そうですね……：こういうの無かったから……：この仕事、まさか一人の人間の人生を大きく左右するだなんて……。

菜央 そんなに大きく考えなくて大丈夫です。

烏山 そうですか？

菜央 はい。(華に)ね？

華 うん……。

菜央 (華に)やるよね？

華 適当なこと言ってるけどさ、どうせあんた明後日には帰るんでしょ？

菜央 そうだけど……。

華 じゃあ、実際動くの、私とこの人じゃない。

菜央 お姉ちゃん。

烏山 私、頑張ります。

華 あなたが頑張るのは、仕事でしょ？当たり前じゃないですか。

菜央 お姉ちゃんがやるのも当たり前じゃない。家族なんだから。

華 (ため息をつく)

菜央 それくらいやろうよ。

華 (不本意そうに頷く)

烏山 ありがとうございます。本当は私、凄くやりたかったんですよ。こんなに凄い仕事ないじゃないですか。

菜央 ですよね。

烏山 はい。頑張りましょう。

烏山は手を差し出す。菜央はその手に自分の手を重ねる。

華は凄く嫌そうな顔で二人を見る。

烏山 どうしたんですか？

華 そうなのいい……要らない。

菜央 やるの。

菜央は華の手を無理矢理重ねる。

菜央 (元気に) おー。

烏山 (元気に) おー。

華 (元気なく) おー。

で、どうすれば良いの？

烏山 とりあえず、チラシ配りと、半径1km圏内の聞き込み、集会場所の定期観察は続けています。

菜央 おおー。さすがプロ。

烏山 声かけもしてますけど、人が多い方が良いので、お二人にはそれをお願いします。

菜央 ネコの名前は？

烏山 ハナちゃんです。

華 は？

烏山 ハナちゃんです。

華 ……やったな、あのバカ親父。

烏山 どうかしました？

菜央 えっと…… (華を指して) 沢登華です。

烏山 えー？同じ？偶然！

華 偶然なわけじゃないじゃない。バカじゃないの？いや、バカは親父か……。

烏山 何で同じ名前にしたんでしょうね？

華 知らないよ、そんなの。

烏山 あらう。

華 ちょっと待って、声かけて、近所でもしたの？

烏山 はい。しらみつぶしにやりました。

華 最悪……。

菜央 (笑いがこみ上げる) ふふふふ。

華 笑い事じゃないよ。「ハナちゃん、ハナちゃん」って、言って回ったってことでしょ？

烏山 はい。お父様と二人で。

華 うわあ、最悪だ……。

菜央 (茶化して) 違和感なかったんじゃない？

華 有り有りだよ。ご近所さんと「あらハナちゃん、家出ですか？」「そうなんです」みたいな会話

してたってことでしょ？信じられない。

菜央 当たらずとも遠からず。

烏山 私、そんな会話してません。私が呼びかける対象はあくまでも、ネコ本人です。「ご飯あげるか

ら出ておいで。」って言いました！

華 余計おかしなことになってるじゃない。

烏山 ああ……。

華 (何かに気づいて) あ、そっか、全部繋がった。だから、由美子叔母さん「やっと帰ってきたのね」って意味深な言い方したんだ。ああもう、最悪……。

烏山 まあでも……ハナちゃんは、ハナちゃんですしね。

華 あのさ、紛らわしいからさ、ハナツーって呼んで。

鳥山 いや……。

華 私が華。ネコが後だからハナツー。良い？

菜央 便宜上、ね。

鳥山 ……はい。

華 で、そのハナツーの行きそうな場所とかどこなの？

鳥山 それが……あまり聞いてないんですよ。

菜央 何で？

鳥山 何か、そういうのあまり教えてくれなかったんです。で、もうちょっと聞けないかなって思って

ココに……。

菜央 お父さんっぽいといえ、ぽいね。

華 まあね。

菜央 あまり何も言わないから。

華 ……お母さん知ってるんじゃない？

菜央 そっか。

華 ちよつと聞いてみて。

菜央 やる気だね、お姉ちゃん。

華 何かさ、同じ名前のヤツがさ、帰ってこないって嫌じゃない。

菜央 ふくん。

華 ハナの名にかけて、名誉を取り戻さないとね。

菜央 無いでしょ、そんな名誉。

華 うるさい。電話。

菜央 はいはい……あ、でも病院って電話無理じゃない？

華 じゃあメールで。

菜央 一応、携帯にかけてみる。

烏山 携帯は、やめた方が……。

華 ですよね？

烏山 入院ですか？

華 今朝、急に……。

烏山 そうですか……。

菜央 (気づいて) そうだよ。お母さんに、遅れるって連絡しなきゃ。

華 それも含めて、よろしく。

菜央が出て行く。

烏山 大変ですね……。

華 なんかね、もう……変な家族ですみません。

烏山 お母様の具合、良くないんですか？

華 どうなんでしょうね？疲れが溜まってただけじゃないかって思うんですけど。

鳥山 それなら良いですけど、ねえ……。

華 二、三日休んだら、元気になるんじゃないですか？

鳥山 元気になってもらわないと。

華 ……そうですね、はい。

鳥山 妹さん、県外だから、しばらくは大変ですね。頑張りどころですよ。

華 退院したら、何とかなるんじゃないですか？面倒くさい父もいなくなったんだから……一人の方が楽でしょ？

鳥山 そんなことないですよ。この家を支えるのは、あなたの仕事です。

華 あの……そういうの他人に言われることじゃないと思うんですけど。

鳥山 勘違いしないでください。

華 勘違いも何も、説教でしょ？これ。

鳥山 私はね、あなたのために言ってるんじゃないの。ネコのために言ってるんです。

華 ……そっち？

鳥山 あなたがどこで何をしようとして、そんなことはどうでもいい。

華 ……。

鳥山 でもね、この子は違いますよ？あなたたみたいに一人では生きられない悲しいネコなんです。この子が幸せに生きていくためには、あなたたちが必要なんです。

華 ……はあ。

鳥山　こんなこと、探偵が言うのはおかしいと思っているでしょ？でもね、私、探して終わりなんてそんなこと出来ない。この子の生涯に責任を持ったサポートをすることが、大切だと思うんです。

華　……よっぽどネコが好きなんですね。

鳥山　そりゃそうですよ。じゃないと、こんな仕事出来ないですって。

華　そうですか？

鳥山　出来ませんよ。一日八時間もネコを探せます？

華　いや、無理です。

鳥山　適当に探したフリをする業者なんて沢山いますからね？

華　ですよね。

鳥山　無事に飼い主さんに会ったときの嬉しいような顔を見たら、やめられませんかよ。

華　うん……なるほど。

鳥山　だから、ね？

華　うん……。

鳥山　聞いてました？私の話。

華　いや、聞いてましたよ。聞いてましたけど、私は……どうなんですかね？

鳥山　あなたが引き取るということも、考えて下さいね。

華　それは無理ですよ。

鳥山　無理じゃない。

菜央が戻ってくる。

華 どうだった？

菜央 やっぱ無理。メールした。

烏山 (華に) どうなんですか？

華 ……戻しますか？話を。

烏山 終わってませんから。

華 (嫌がって) ええ……。

菜央 何の話？

烏山 お母様が入院されてるんですから、今後のこととして、お姉さんが引き取ることも視野に入れるべきだと思っんです。

菜央 ああ……。

華 無理でしょ？

菜央 でも、そうするしかないんじゃない？

華 は？

菜央 だってここに放置するわけにもいかないでしょ？

烏山 ご飯はどうするんですか？

華 外でやっていけてるんだから、何とかなるでしょ？

菜央 それ、ここにいるってだけで、外にいるのと同じじゃない。

烏山 その通り。

華 (菜央に) じゃあ、あんたが飼いなさいよ。

菜央 私？

華 可哀想と思うなら、あんたが連れてけば良いじゃない。私は可哀想と思わない。

菜央 うわっ、最低……。

烏山 人のエサに慣れたネコが、外の世界で生きるのは大変なんですよ？そういうネコにした責任を取るべきです。

華 それお父さんに言ってよ。私、関係ないじゃない。

菜央 そんなこと言っても、仕方ないでしょ？

菜央がスマホを見る。

菜央 お母さんから来た。

烏山 (華に) ちゃんと考えて下さいね。

華 はいはい……。

菜央 読みます。

烏山 ちよっと待って下さい。

烏山は、メモ帳と録音機を準備する。

菜央 おおくさすがプロ。

烏山の準備が終わる。

烏山 はい、どうぞ。

菜央 「ハナは賢い子です。」

烏山 (メモを取りながら) 賢い……。

華 ほらね、出来る子なのよ、ハナは。

菜央 お姉ちゃんのことじゃないでしょ。

華 分かったから、次。

菜央 「しっかりと自分の気持ちを主張します。」

華 するんだよ、ハナは。イエス・ノーをハッキリ言う。なかなか出来ないよ？日本人には。

菜央 ネコでしょ？

華 ネコだけど、はい次。

菜央 「誰にも頼らずに生きられる逞しさがありません。」

烏山 (メモを取りながら) 逞しさ……。

華 ハナは一人で、いや一匹でも生きていける。それぐらい逞しいの。

菜央 「でもそこが、お母さんは悲しいです。もっと頼って欲しいです。」

鳥山 (メモを取りながら) 頼って欲しい……。

華 ……。

菜央 「辛いときには、『辛いよ』って。苦しいときには『苦しいよ』って言って欲しいです。そうい

う自己主張は絶対にしません。」

鳥山 (メモを取りながら) 本心は言わない……。

華 (菜央に) ちよつと貸して。

華は菜央からスマホを受け取って読む。

鳥山 終わりですか？

菜央 何か……ネコの特徴じゃないみたいで……。

鳥山 どういうことですか？

菜央 とりあえず、ちよつとストップ。

鳥山は録音を止める。

菜央 お姉ちゃん、ごめん。私の書き方が悪かったんだと思う。ごめん。

華 ……こんな形で母親からカミングアウトされるとはね。

菜央 ごめん……。

華 いいよ、別に。分かってることだし。
……。
菜央 ネコを探そう。うん。もう一回メール。
華 うん……。

菜央は華からスマホを受け取り、メールする。

鳥山 ハナちゃんの特徴じゃなかったんですか？
華 あっちのハナちゃんじゃなくて、こっちのハナちゃんの特徴……って何で分からないんですか？
鳥山 そうなんですか？
華 あんたさ、ネコの気持ちは分かってても、人の気持ちは分からないんだね。
鳥山 ああ……よく言われます。
華 気をつけた方が良いよ？
鳥山 ……はい。
華 客商売なんだからさ、そういうの大切でしょ？
鳥山 ……どうしたら良いんですかね？
華 私に聞く？
鳥山 お客様の声として。
華 そんなこと言われてもなあ……。

烏山　　お願いします。
華　　(困って) ええ……。

菜央のスマホに着信があり振動音が聞こえる。菜央は確認する。

菜央　　は？

華　　どうした？

菜央　　……「そんなネコ知らない」って。

華と烏山は、菜央のスマホを覗き込む。

華　　……どうということ？

菜央　　どうということ？

烏山　　どうということでしょ？

暗くなる。

明るくなると、次の日の昼。居間には菜央と烏山がいる。

烏山　　何時頃、戻られるんですか？

菜央 顔出すだけって言ってたんで……何時かはちよつと……。
鳥山 サービス業か何か？
菜央 知り合いの所で……事務？みたいです。
鳥山 ふん。
菜央 あまり知らないんですよね。
鳥山 そんなもんなんですか……。

菜央は不思議な顔をする。

鳥山 あ、私、一人っ子なんで。
菜央 ああ……。
鳥山 別に姉妹が、羨ましいとか思ってますんけど。
菜央 はあ……。
鳥山 でもねえ……やっぱり、円満な家族が良いですよね。
菜央 あの……。
鳥山 勘違いしないで下さい。『ネコのためには』ってことですから。
菜央 ああ……。
鳥山 なんとか、お二人が仲良くする方法をね、見つけられたら良いなあって。
菜央 どうでしょうね。結局、昨日も病院に行きませんでしたし……。

鳥山 ああ……あのメールで。

菜央 メールは言い訳じゃないかな……根が深いですから。
鳥山 というと？

菜央 ……これ言わなきゃいけない話？

鳥山 是非。ネコのために。

菜央 ……基本、過保護なんですよ、うちの親。

鳥山 そっち……。

菜央 私も外の大学受けるって言ったら、散々言われたし、お姉ちゃんにはもっと酷かったから……。

鳥山 あらあ……。

菜央 嘘吐くじゃないですか、子供の時って。

鳥山 吐きません。

菜央 ……ん？

鳥山 ネコは絶対に嘘を吐きません。

菜央 ……お姉ちゃんは、よく吐いてたんです。

鳥山 テスト隠してたりとか？カツオくんみたいに。

菜央 そういうのはしてなかったと思いますけど……全然大丈夫じゃないのに、大丈夫とか、痛いのに
痛くないとか。

鳥山 カワイいじゃないですか。

菜央 で、高校の時に、学校行きたくないって言って、そのまま行かなくなっちゃって……行けば良か

ったのに、行けなくなっちゃって。

鳥山 いいよ、って言っちゃったんですね……。

菜央 なんかね……分かんないですよ、そういうの。

鳥山 分かります。どんなにカワイくても、エサをあげちゃいけない時ってありますからね。

菜央 ちよつと意味違いませんか？

鳥山 違いますよ。生き物を育てるという意味では同じです。

菜央 うん……まあ。

鳥山 で、グレちゃった。

菜央 グレた……うん、まあ。捻くれちゃったんでしょうね。

鳥山 そっか……問題ですね。

菜央 うん……。

鳥山 お姉さんに引き取ってもらう案は、考え直さなきゃいけません。

菜央 まあ……そもそも飼ってたのか？って話ですけどね。

鳥山 それもあるかあ……。

菜央 あ、そうだ。携帯を預かって来たんです。お父さんの。

鳥山 ほう。行動パターンが分かるかもしれないですね。

菜央 いや、履歴見ても、何も分からなかったんですけど、何か変なメモがあって。

鳥山 素人には分かりませんよ。プロに任せて下さい。

菜央 ……ネコのでしょ？

烏山　ネコのです。
菜央　……ま、いいや。えっと……コレ。

菜央は、携帯を烏山に見せる。

菜央　何だと思います？

烏山　愛人……にしては多すぎますね。

菜央　こんなに愛人がいたら、流石にお母さんも気づくと思います。

烏山　何でしょう……？ミステリーですね。

菜央　勝手にミステリーにするのやめてくれませんか？

烏山　いや、でも……。

チャイムが鳴る。

華　（声のみ）菜央。開けて。

菜央　お姉ちゃん？

菜央は玄関へ行く。

華 (声のみ) 何で閉めたの？
菜央 (声のみ) いや、鍵は？
華 (声のみ) 持ってないよ、そんなの。
菜央 (声のみ) 知らないし……。

華と菜央が戻ってくる。

華 (烏山に) あ、こんにちは。
烏山 お邪魔してます。
菜央 大丈夫だったの？会社。
華 ああ、うん。休みだし。
菜央 ……そっか。
華 (菜央に) で？この人がいるってことは、まだ見つかってないってことだよね？
烏山 正解！
華 そんな胸張って言うことじゃないと思いますけど。
烏山 ですね……。
華 知らないって言ってたんでしょ？お母さんは。
菜央 お姉ちゃんと会ってるって思ってたみたい。
華 どういうこと？

菜央 一応ね、何回か報告はしてたらしいんだよね。「今日、ハナにあった」とかなんとか。

華 ……面倒くさい名前付けるから。

菜央 会ってないよね？

華 ……誰が？

菜央 お姉ちゃんが。

華 誰と？

菜央 お父さんと。

華 何で会わなきゃいけないの？

菜央 こっち見て言って。

華は菜央を見る。

菜央 ……嘘でしょ？

華 は？

菜央 何で嘘吐くの？

華 勝手に決めつけないでくれる？

烏山 まあまあ……。

華と菜央は、一呼吸して落ち着く。

烏山 会ったんですか？

華 蒸し返すの？

烏山 ハナちゃんの命に関わるんです。

華 私がハナちゃん。あっちはハナツ！。何度も言わせないで。

烏山 そういう細かい話は良いですから……時間が無いんです。

華 ……何の？

菜央 烏山さんの契約、今日までなんだって。

華 何それ？

菜央 搜索期間っていうのがあってね、五日間って決まってるんだって。

烏山 今日までなんです。

華 ……あっそ。だったらこんなところで油売ってないで、捜しに行きなよ。仕事でしょ？

烏山 捜しています。

華 していないじゃない。なにくつろいでんの？

菜央 違うよ。

華 は？

菜央 ずっと捜してるよ、烏山さんは。昨日の夜も、今朝も、時間関係なしにやってくれてるんだよ？

華 ……知らないよ、そんなの。

菜央 みんな出来ることやってるんだからさ、協力してよ。

華 してるでしょ？何言ってるの？

菜央 してないよ。おかしいじゃない、明らかに。

華 何もおかしくないって。

烏山 お父様に会って、何か聞いたんじゃないんですか？

華 会ってないって言ってるでしょ？

菜央 お姉ちゃん。

華 ああ、もう。うるさい。

菜央 いい加減にしてよ！

華 ……。

菜央 お姉ちゃん、何かした？昨日、病院行かずに何してた？お父さんがやりたかったこと叶えてあげ

たいとか、何で思えないの？

華 うるさい！

重たい空気の沈黙。

華 もう、止めよう。止め止め。ハナツーは捜さない。

菜央 お姉ちゃん……。

華 捜索期間ってあれでしょ？これ以上捜しても、死んでるかもしれないってそういうことでしょ？

烏山 ……そういう確率が高いということです。

華 もうその辺で野垂れ死んでるんじゃない？よく言うじゃない。ネコは死ぬ前に姿を消すとか。そういうことじゃないの？

菜央 ……。

烏山 それは誤解です。

華 いや、そうでしょ？

烏山 違います。外敵から身を守るために、安全な場所に隠れるんです。弱っている姿を見せることは、死に繋がりますから、それを隠すのが本能なんです。本能に従って行動しているだけなんですよ。

華 ……。

烏山 どういう理由か分かりませんが、お父様はきっと野生のハナちゃんに外で会ってたんでしょ。

それで情が移って、私に依頼したのかもしれない。

華 じゃあもういいじゃない。放っついてよ。迷惑だから。

烏山 でもそれがお父様の意志なんで……。

華 もういいって。

烏山 ……。

華 お願いします。帰って下さい。

烏山は菜央を見る。菜央は申し訳なさそうに会釈する。

それを見て、烏山は帰り支度をし、玄関へ向かう。菜央がそれを追っていく。

しばらくして、菜央が戻ってくる。

壁により掛かり、天井を見上げる菜央。華は俯いている。

菜央 会ったんでしょ？お父さんと。

華 ……何で？

菜央 伊達にお姉ちゃんの妹を長くやってないからね。

深く息を吐く華。

華 会った。

菜央 ……いつ？

華 先週。一回だけ。

菜央 ……そう。

華 本当だよ？

菜央 うん……。

華 一回だけ会って……怒られた。

菜央 ……何で会ったの？

深く息を吐く華。

華 ……子供出来ちゃったから。

菜央 は？

華 ……うん。……「は？」だよね。

菜央 え、いやちょっと待って……え？

華 うん……。

深く息を吐く華。

菜央 ……それで？

華 うん……勝手に産むわけにもいかないからさ、一応話しようと思って、話したら、怒られた。

菜央 ちょっと待って……相手は？

華 ……たぶん、あの人だなんていう人はいる。

菜央 彼氏とかじゃないの？

華 ……簡単に言うと、そうだね。

菜央 ……そりゃ怒られるよ。

華 だからね、どうしたら良いか分かんなくて、話したら、怒られて……。

菜央 ……バカだねえ。

華 バカだよねえ。親になる実感とか全然無いし、子育てとか見当も付かないし、バカだと思う。

菜央 ……うん。

華 でもさ……産めとか、産むとか、何にも言ってくれないんだよ？「何でそんなことしたんだ」とか、「どういふことか分かってるのか」とか言われてさ。私、何でこんなことしか言われないんだらうってムカついて帰った。

菜央は頭を抱える。

華 結局さあ、私のせいってことでしょ？私があんな話したから、だからお父さん、ストレスかかって……全部、私じゃない。

菜央 そんなことないよ。

華 何にも出来てないから。迷惑しか掛けてないもん。怒らせることしか出来なくてさ、最低だよ。違うって。

華 違わないから。そういうの良から。

菜央 お姉ちゃん……。

華 私はさ、お父さんを苦しめることしか出来なかったんだよ。……。

菜央

ふと何かに気づいた菜央は、父の携帯を手にし、さっき烏山に見せた画面を華に見せる。

菜央 お父さんの携帯。

華 ……。

菜央 見て。

華 ……。

菜央 見て。

華は、父の携帯を見る。

菜央 それたぶん、子供の名前だよ？そんなに沢山考えてさ……嬉しかったんだよ、きっと。産んで欲しかったんだよ、お姉ちゃんに。

華 ……バカじゃないの。何でお父さんが名前付けるの？

菜央 だって、お父さんだもん。

華 ネコみたいな名前ばかり考えてさ、いい加減にしろっつうの。

菜央 ……うん。

華 しかも何で、女ばかりなのさ？

菜央 ウチ、女しか生まれてないから……。

華は父の携帯を強く握りしめる。

菜央 私、お父さんが何でハナちゃんを飼わなかったか、分かった気がする。
華 うん……そうだね。
菜央 ……線香でもあげる？
華 ……うん。

華は立ち上がり、菜央を見る。と、菜央が笑う。

華 笑うな。
菜央 だって……。

つられて華も少し笑い、ふと菜央は窓の外を見る。

菜央 ああ。
華 ああ。

庭先で何かを見つけた華と菜央。

二人を包み込むように、暗くなっていく。

(おわり)